

自然に魅せられた無垢なる世界

井上ひろ美さんの作品はこれまで山梨県芸術祭をはじめ、県民文化祭や白壽会で拝見してきた。彼女は中央の画壇をほとんど経由することもなく、決して華々しい画歴を有するわけでもない。地方の団体でコツコツと日々作品を描きながら、常に自然との対話を重ねる日本画制作のスタイルは、とりわけ新鮮に映り、彼女の持つ無垢なる感性を強く感じた。

そして、孤高とまでは言わずとも、静寂な空間の中に常に自然の息吹や季節の移ろいを織り交ぜた作品を生み出そうとする彼女の仕事は、特に近年以降はより繊細な筆致と色彩の優雅さも加わって、更に深みを増してきたように思う。

1948(昭和23)年に、東京都目黒区で生を受けた彼女は、その後小学校3年時には父親の故郷である山梨に移住した。すでに幼少期から絵を描くことが好きだった彼女は、甲府第一高等学校時代には日本画家の須藤猷や三枝茂雄といった、伝説の一つにもなっている美術教師に巡り合い、彼らの強烈な個性に接したことは、少なからず画家としての生き方に影響を与えたと思われる。

1966年には甲府第一高等学校を卒業し、山梨大学へと進学する。大学では数学を専攻するものの、美術や芸術にも強い興味を抱き始め、たまたま履修した授業で出会った日本画の世界に強く魅せられたと言う。また、当時の美術科教授だった加藤和夫との運命的な出会いは、その後の日本画家への道を歩み始めるきっかけにもなっていた。そして、加藤の生真面目な制作姿勢と精緻な技法に裏付けられた叙情性豊かなその作風は、彼女が山梨大学の学生時代から本格的に絵画を志す上においても精神的な礎となり、その感性を今も深く継承している。

彼女の描く風景画には、山や田舎の小道、田畑、川や草木など様々な自然や生物が多く描かれるが、特に水田風景は度々描かれてきた。その中の《緑風》という作品を見てみると、夕刻迫る初夏の逆光に照らされた水田が美しい夕照を水面に映して、柔らかな光と影が戯れる淡いコントラストがアクセントにもなり、とり分け印象的な爽やかな作品である。

他にも1995年に描かれた《翠逢》、《緑映》や、1997年の《森の刻》、2007～9年に描かれた《悠久》など、山の花を描いた作品を挙げるができる。これらの作品に共通して感じられる時の移ろいのような長閑な空気感、彼女の画風の特徴の一つとして挙げて良いだろう。そして、巧みな透視図法による遠近法の効果が、山間の静寂な田園風景をよりドラマチックに演出していることに気づかされるのである。

このように、彼女の風景画は実景描写だけに終わらない、生きとし生けるものの全ての命の営みまでを捉えようとする深い洞察力と、画面を構成する巧みな表現技法とが常に融合しているように思う。そして、特に田園風景を描いた作品に見られる透視図法だけでなく、1997年の《きざし》や2009年の《緑映》に見られるような、画面を水平、あるいは斜めに大きく横切る分割線による効果である。これらの表現は、画面の中に一つの動勢を生み出すことに成功しているように感じるのだ。そして、ネムノキやシシウド、曼珠沙華といった、ごく普通に山野で見かけることのできる木々や植物たちの表現では、画面の中心をあえて左右にずらすことで生まれる、不安定さがもう一つのムーブマンを生み出し、動植物の気配や生命感、あるいは躍動感を表現する上でも功を奏していると言える。

2012年の10月に甲府で開催された「あの日 あの時」と題された個展の際に手作りされた小カATALOGが私の手元にある。そこには一枚一枚の作品に画家のコメントが添えられて、他にも中国の故事や歌詞が引用されながら、画家の自然観や人生観までもが吐露されているように思われた。

また、彼女はある新聞の取材では「街いのない“ありふれた自然”に強く心を惹かれ、ありふれているからこそ心に染み入る様な風景を描いていきたい」と語っている。

そこには、日常の自然の美しさを賛美しつつも、常にそのありふれた日々にも心を開き、自己表現としての日本画に自然との調和と共感を求めているように思えるのである。そして、生きとし生ける全ての自然と命の循環を絵筆で記憶しようとする、明確な描くことへの目的意識が伝わってくるのである。

彼女が長い時間を経て作品の中に紡いできた個性と感性が、本展覧会でどのように人々の心を揺さぶることができるのか、期待とともに楽しみである。

南アルプス市立美術館 館長 向山富士雄



《秋實》2000年 紙本着彩 60.6×41.0cm
個人蔵



《冬韻》2013年 紙本着彩 70.0×35.0cm
山梨産業保健総合支援センター蔵



《歴史》2007年 紙本着彩 116.7×91.0cm
個人蔵



《秋暁》2009年 紙本着彩 60.6×72.7cm
さいとう眼科クリニック蔵

関連イベント

美術対談 「四季の彩りを描く」

- 講師
井上ひろ美×向山富士雄(当館館長)
- 日時
1月28日(日)午後2時～
- 場所
美術館研修室
- 定員
50名(1月20日(土)午前9時30分より受付)
- 参加料:入館料に含む

井上ひろ美 画歴

- 1948年 東京都目黒区に生まれる。
- 1963年 山梨県立甲府第一高等学校入学。須藤猷、三枝茂雄の助言を受ける。
- 1966年 山梨大学教育学部入学。加藤和夫と出会う。
- 1970年 山梨大学教育学部卒業。以降加藤和夫に師事、本格的に日本画の制作を始める。
- 1971年 第24回山梨県芸術祭美術展に《望》を初出品し、優秀賞受賞。以降1997(平成9)年まで毎年出品。優秀賞・実賞など受賞多数。
- 1984年 第13回白壽会展に初出品し、山梨日日新聞社賞受賞。会員推挙を受け会員となる。以降2023(令和5)年まで毎年出品。
- 1995年 日米女流6人展(山梨/三彩洞)。
第8回日本の自然を描く展にて入選(東京/上野の森美術館)。
- 1996年 第25回白壽会展にて会員賞受賞。
- 1997年 第9回国際美術大賞展にて入選(主催日本選抜美術家協会/東京都美術館)。以降1998年第10回展にて入選。
- 1998年 第7回四万十川絵画展に出品、絵画展記念賞受賞(高知)。
- 1999年 55人のアーティストによる3号展(山梨/三彩洞)。
山梨県芸術文化協会展示部門合同展覧会出品(県民情報プラザ・県民ギャラリー・オープン記念)。
- 2000年 第1回信州高遠の四季展にて入選(長野/信州高遠美術館)。以降2003年第2回展、2006年第3回展、2009年第4回展、2012年第5回展、2015年第6回展に出品・入選。第4回展は秀作。
第8回四万十川絵画展にて絵画展記念賞受賞(高知)。
- 2001年 第1回やまなし県民文化祭美術展招待作家として《爽蒼》を出品。2003年第3回展以降2023(令和5)年まで毎年招待出品。
- 2005年 第5回てんびんの里を描く日本画コンクールにてエフエムひこねコミュニティ放送株式会社賞受賞(滋賀県/てんびんの里学習センター・ホールあじさい)。
3人展(山梨/ギャラリー・シュオン)。
- 2007年 第6回てんびんの里日本画コンクールにて京都新聞滋賀本社賞受賞。
- 2011年 3人展(山梨/ギャラリー・シュオン)。
- 2012年 「あの時 この時 井上ひろ美日本画展」(山梨/桔梗屋花葉亭美術館通り店アートギャラリー)。
- 2013年 第28回国民文化祭・やまなし2013山梨の作家展美術展に《冬韻》を招待出品。
- 2014年 第14回やまなし県民文化祭美術展に《径》を招待出品。同展審査員となる。
- 2017年 第29回白壽会副会長に就任。
- 2022年 第21回やまなし県民文化祭美術展に《白秋》を招待出品。同展専門委員となる。



交通のご案内

- 電車・バス JR中央線 甲府駅下車(バス利用35分)
山梨交通バスターミナル
西野経由小笠原下町行き「市立美術館」下車
十五所経由鉢沢営業所行き「戸田町」下車 徒歩10分
- 自動車 県道42号線沿い
中央自動車道 甲府昭和ICより20分 県道42号線沿い
中部横断自動車道 白根IC・南アルプスICより5分 県道42号線沿い

美術館公式HPはこちらから
<https://www.minamialps-museum.jp/>

美術館公式facebookはこちらから
<https://www.facebook.com/235851723615051>

* 展覧会、各イベントは延期または中止になる可能性があります。
ご来館前に当館ホームページ等をご確認ください。



南アルプス市立美術館
MINAMI ALPS CITY MUSEUM OF ART

〒400-0306
山梨県南アルプス市小笠原1281
TEL 055-282-6600 FAX 055-282-6601